

911.3

ク

人
五
百
題



無東漢編輯

今久五百題

涉躐子輅按令



叙 漢

古より不測ありしを例としてしるは深ありしを
 條と攀つてしる言史さるるもあらずしるは
 ことくしるは言しとつてたがひありしを
 今久五百題とてしるは深ありしを
 事しては深ありしを言しとつてたがひありしを
 流しありしを言しとつてたがひありしを
 事しては深ありしを言しとつてたがひありしを

白ありて人なり白ありて人ありたりし也
物にてもあふれし其部族やも思ひまほし
あまをさふたそ今人の白あり 回教の
さーくくしものさうさう補ふ

○等類同案の白を陰きすと新古とある
そばく之友と筆記もやうに貴族老若の
陽を志しき事舟井のつらぐのさ

○み七五の文字上を下ありをさう置
或はてふをば然久し名業されしもの
あふれと古に信家より出る事さう接し

又ハ人信のりさたるをさうまうにさ
たうもあふれは是れハその信若のさう
信てぬおさ

○信の考しし以て人の身成り強きさ
あふかすかめをその信し強きも抄わ
あまハあかそれあまをさうく阿のめ
信強をさうくさうあまさうたす
あまさうくあり

買入証

明治三十五年弥生月百朝

大町吉物見世

源助使十金檢志

（上下合）買入

梨葉

今人五玉顯高之部目錄

花	一	櫻	二	糸	三	四	初	五	四
逢	四								

歳且部

元日	五	初室	五	初日	五	初	六
----	---	----	---	----	---	---	---

初霞	六	初務	六	初	六	初	六
----	---	----	---	---	---	---	---

初曆	六	初	七	書	七	之	七
----	---	---	---	---	---	---	---

花春	七	初代	八	箱	八	門	八
----	---	----	---	---	---	---	---

大ふく	八	嵩固	八	屠	八	雜	八
-----	---	----	---	---	---	---	---

冬著	九	管	九	蓬	九	柳	九
----	---	---	---	---	---	---	---

書初	九	青	十	葉	十	若	十
----	---	---	---	---	---	---	---

子鞠	十	破下弓	十	水祀	十一	若水	十一
植物之部							

子日	十一	小松引	十二	七種	十三	若	十三
芥	十二	若菜	十三	梅	十四	柳	十四

野老	十五	下蒲	十五	若草	十五	糖	十六
红梅	十六	木の芽	十六	落臺	十七	葉	十七

莖	十七	五加木	十七	藪草	十七	山菜	十八
木瓜	十八	芦角	十八	棲木	十八	茶摘	十九

棠?	十九	菜花	十九	桂御	十九	梅	十九
海棠	廿	連柄	廿	梨花	廿	虎杖	廿

木蓮花	廿	青枝	廿	苗代	廿	蕨	廿
薔花	廿	藤	廿	少吹	廿	時	廿

生類之部

黃鳥	廿	猫の患	廿	白臭	廿	鳥の巢	廿五
親雀	廿	雀	廿	雛子	廿	雲雀	廿六

啼	廿	舌	廿	駒鳥	廿	鶯	廿八
啼	廿	舌	廿	鶯	廿	鶯	廿九

律	廿	鏡	廿	鏡	廿	鏡	廿九
律	廿	鏡	廿	鏡	廿	鏡	廿九

時	廿	候之部	廿	小結	廿	角	廿
時	廿	候之部	廿	小結	廿	角	廿

佐佐班	廿	むつき	廿	如月	廿	珠生	廿
左義長	廿	強引	廿	雲	廿	掃月	廿

佩	廿	新入	廿	余香	廿	春寒	廿
佩	廿	新入	廿	余香	廿	春寒	廿

河返	廿五	暖	廿五	燒野	廿五	山燒
殘雪	廿五	春雪	廿五	雪解	廿五	春風
喜風	廿七	喜雨	廿七	春日	廿七	春の霞
春夜	廿七	春月	廿七	春水	廿七	水温
海苔	廿九	草餅	廿九	糸柁	廿九	陽空
二日灸	廿九	初午	廿九	彼岸	廿九	市忌
涅槃	甲	西行忌	甲	永日	甲	出代
雛	甲	鷄合	甲	汐干	甲	長閑
畠打	甲	田打	甲	別家	甲	春祭
壬生師	甲	峯	甲	夏辺	甲	春惜
行春	甲	春潮	甲		甲	

卯分至五十五紙

今人五玉野夏之部目録

生類之部

時令	一	閑古	三	老学	三	与雀	三
翡翠	三	羽枝鳥	三	轉	四	水鷄	四
鶺鴒	四	喜鷺	四	浮巢	五	管	五
鴛鴦	五	法の子	五	枝枝	六	毛虫	六
了了	六	蚤	六	繩	六	水鳥	六
蚊	七	蚊柱	七	故道	七	蝸牛	八
蝉	八	まの子	八	灯取虫	九		
更衣	九	裕	九	青簾	十	葵菜	十
		時候之部					

あがり 十 外 十 草月 十 水月

夏花 土 夏草 土 灌餅 土 花月

筑十葉 土 大矢敷 土 短夜 土 麦株

美さう 土 新茶 土 絹 土 松奥 土

傾カヤ 土 懐 土 梅 土 午池 土

競馬 土 赤餅 土 五月雨 土 入梅 土

虎う雨 土 五月鬧 土 夏月 土 夏望 土

夏山 土 火串 土 田植 土 早乙女 土

早苗 土 青田 土 田子飯 土 廟子 土

芝庭 土 吊帳 土 夏羽狭 土 怪子 土

総園會 土 水室 土 富士詣 土 雲等 土

一夜酒 土 暑 土 夕多 土 簞 土

竹婦人 土 涼 土 風薫 土 麦穂 土

心太 土 打水 土 瓜 土 冷瓜 土

沖鱈 土 漬物 土 葛水 土 さりる 土

夏夜 土 川橋 土 秋色 土 七の巳 土

湯枝 土 植物之部

若菜 土 菜蓨 土 若杞 土 新樹 土

茂 土 木石園 土 夏木 土 常緑木 土

桐花 土 葉柳 土 夏柚 土 夏栞 土

櫻花 土 桜花 土 粟花 土 合歓花 土

夏草子 土 楊梅 土 柿花 土 玉の如 土

燕子花	卅三	牡丹	卅一	芍薬	卅一	葵	卅一
苔花	卅一	弁の花	卅一	菖子	卅一	茨花	卅二
柿の子	卅一	菖	卅一	茄子	卅二	豆花	卅三
角豆花	卅三	红花	卅三	夏草	卅三	接子	卅三
百合	卅三	橘	卅四	芙蓉	卅四	唇魚	卅四
かごとも	卅四	望月各	卅四	夕夜	卅五	藤花	卅五
洋	卅五	藤州	卅五	葛藤	卅五	川骨	卅六
葎	卅六	蓮	卅六	浮葉	卅六	伏降	卅七
石菖	卅七	柏志の	卅七	若井	卅七	今年外	卅七
林檎	卅七	夏朗源	卅八				

今人五玉歌集白集

八雲 東 溟 轉
 涉壁 千 輅 授
 桐家 名代也 悠く 一具 了知 由 月 花 仇

花

春之部
 八雲 東 溟 轉
 涉壁 千 輅 授

桐家 名代也 悠く 一具 了知 由 月 花 仇

手紙あひしるに強て女まきふ
ふまくとまふはらふの蒼くぬ
よひさへ入物れはまらるる一山櫻
軽のりふに座敷のまふはらふを
吹風をまふしるしるしるも
是の砂まらふしるしるしるも
ふらふらふまふらふらふらふ
ふらふらふらふらふらふらふ
吹ふらふ風をまふらふらふらふ
植ふらふらふらふらふらふらふ
別くくまらふらふらふらふらふ

風朝
春了
二岳
三三
市之
月底
湛石
清年
竹與
完伍
東漢

系

櫻

つ

櫻

幹中へはまらふらふらふらふ
下まらの上やまらまらまら
手紙まらまらまらまらまら
咲くまらまらまらまらまら
あつてまらまらまらまらまら
退障のまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら

鼎左
柳様
嵐外
沙鷗
者母
夫翠
負祇
梅意
草池

逢 櫻

初さくらをさくれー 踏山武
水鳥も廻りてあふー ころさ丸良

互尔
千粒

少遠く入る甲斐あり逢 櫻

木木

日何さうかきたる地は逢 櫻

慈光

鳥さけやされしは木の逢 櫻

水竹

氷面の障る山の逢 櫻

杜有

まきさくありや梁舟の逢 櫻

後物

元りやや葉をさくむる逢 櫻

蒼乱

元りやや中さ地を踏踏る逢 櫻

逸測

元りややあふて逢 櫻

并左

子んや元りく見て逢 櫻

潮長子

元りやや高き逢 櫻

相一

元りやや成と極るや門の逢 櫻

逢流

元りの名ものあり逢 櫻

史子

元りや水の上逢 櫻

南枝

元りや雨をさく逢 櫻

護物

元りや春の元日逢 櫻

風明

初さくらをさく逢 櫻

大鼓

櫻のしそ初志のを逢 櫻

梅香

そのあふあふ逢 櫻

由聖

元日



初志

初日

初日世をあらたけし骨に
をんまの命も何の念もなく
梓高支たけり甲斐ある初り哉
汐りそくはく度と初り敷
掃出で意をいれり初り哉
二云車を初り初り言の非
益人の時を初り初り何
ふたふたの初り初り何
あまのき方古を初り初り

千代

得黄

長山

仙居

未月

素屋

芳英

曾見

初雞

初雞のりや唯冬の初り
初雞や喜海原の初り
と川初や中く海原の初り

山骨

竹年

梅香

初鹿

初鹿のりや唯冬も
尺力也裁鳥の初り
初鹿何えと鹿と初り
鹿先也りの出る初り

龍風子

桐世

茶屋

本侯

初鴉

初鴉のりや唯冬を
初鴉のりや唯冬を
初鴉のりや唯冬を
初鴉のりや唯冬を

山骨

素屋

龍成

採きの聲もさきかよふさめもある
陽も何となく水でもくわさるる

や
空

獲ふある言もひさし茶のるる

具

杖もいし梅もさくさく花のま

火十

とく春も地勢もいさくむのき

北像

春も先記猶もと那のけ

芳英

んあしと茶もさくさく花のるる

半安

人衆のまぬくまふもあつける

佐年

繁の戸をたたくへ吸て花の本

唐乳

萬ふとれてりし何れも花のま

卓池

法代
の表

またかき川も梅も法代のま
草のたもふんりのまも法代りま

所山
性

福

寿
草

福も草も梅もあつるまも
乙花のゆて咲く福も草
言一杯咲ふあつる福も草
福も草も梅もあつるまも

万
一
松
荷

門
表

門松も花のけあや二日月
門松も花のけあや二日月
門松も花のけあや二日月
門松も花のけあや二日月

風
重
左
多代

蓬菜

あし
者

強く喰つてを吐す日かた

蓬菜や顔てをす海老の殻

蓬菜のつらさを中を食ひ自ら

蓬菜や常は机のあり

蓬菜のむねんよゆる腹り

蓬菜や祖父のいたく

鼻

梅宮

由哲

落

茂徳

蒼胤

冬初や思ひ切たるを走り

門邊にされは世の情より

礼帳やけあき名に会ひ入

連をく居りて傳はる蓬菜

蓬菜のよき秋傘のせむ

蓬菜のよき秋傘のせむ

蓬菜のよき秋傘のせむ

占春

鳳朝

臨里

雲

冬

大

抱像

万
歳

蓬菜

善羽子

戸木の門引合も善羽子の中
戸木や焚火でのそす煮の飯
善羽子や竹の葉のよ片あくる

祀てあらあられと嬉し羽子の音
さーの歌ついでに座を和羽子に
おくらをて途はなすあさう羽子の友

咽をねいよふぬるもすう井
氣の祝のもすう屋々和言たり

櫻 一 片
水竹

併兄
法石
古翠

渡物
善何

手鞠

水祝

善

水

と流らや風音とれは毎のちる

老かむもささうのてあ祝
壽おしてとれて海も和 水祝

善水也と解てもらふお戸の蓋

梅溜りく善水 汲りく

善水や毎も起る灯の明る

わりの水を汲先ま何の秋晴来

善水の井子庭のあさおすひか

井子築ひ山ありあふや知字日

梅

梅香
赤葉
杜鰲
丁生
善非

由誓
善少

子

日

小松 奥

野津しと思ふ子りや 鶯の声
眞實を 狐の心 籠るも 不り
世のあつてもあつても 世の子り
子房の 秘を 子口の 秘り 一

葉一葉し あほ子房は 小松我
老のこころ 引くとも 狂少中 我
愛うめし 小松我の 也 故り
有物も あつても 秘り 小松引
と 和愛し 留る人 あり 小松の
奥に 小松房の 秘 先子 とも 引き
と 小松の 秘り 思ふ也 奥に 秘

松計
一具
千輪

桐葉
葉葉
徳々
情子
永月
而後
東漢

七宗

七宗

七宗物 七宗の 秘り 兄 遠く
姐 板の 七宗の 秘り 餘り
七宗の 秘り 引くとも あり 水

甚く 秘り あり 秘り 秘り
あり 秘り あり 秘り 秘り
大 秘り 秘り 秘り 秘り
秘り 秘り 秘り 秘り
大 秘り 秘り 秘り 秘り
秘り 秘り 秘り 秘り

備物
備物
西故

備物
備物
備物
備物
備物
備物
備物
備物
備物
備物

芥のふんしつはさういふのは研裁

由曾

野の鳴家へ度々也田芥つと

得筭

芥搗のふんしつはさういふのは研裁

毒列

芥搗も搗いつとさういふのは研裁

羽人

芥のふんしつはさういふのは研裁

虚天

芥搗を研裁し芥の照葉共

祖々

芥搗と芥と搗んで搗りつと

土十

部は今すいふはさういふのは研裁

下多

七多も搗りつとさういふのは研裁

後物

芥搗のふんしつはさういふのは研裁

一省

若菜

丁の若菜若菜の節りるは危

一具

若菜若菜の節りるは危

風網

二三の星をいふはさういふのは研裁

幌子

若菜若菜の節りるは危

未葉

若菜若菜の節りるは危

芥英

汁の若菜若菜の節りるは危

平山

若菜若菜の節りるは危

依呼

搗りつとさういふのは研裁

卓式

若菜若菜の節りるは危

身空

若菜若菜の節りるは危

若山

若菜若菜の節りるは危

若海

若菜若菜の節りるは危

梅室

桃 きたしんすもはけはるあおき 子格

山宮や 多々花の 桃の花 羞恥

桃も 香を 舞うも 中 桃の花 抱儀

去 遠 けを 及ぶ 桃の花 沙路

星 宿 へ 桃の 宮の 花 湯花

桃の 香や 中 の 月を 並ぶ 山子

有 来 の 花 散 ら ず 春 壺天

桃 折 ら ず 出 ぬ 教 へ 悠々

言 葉 を 結 ぶ 桃 花 の 隣 波 同

結 ぶ 花 ぬ け ぬ 中 謀 の 志 万籟

桃 の 月 前 へ 中 の 月 未木

折 中 へ 中 の 月 出 ぬ 山 の 桃 卓地

ぬ 心 よう 幸 山 の 中 桃 の 花 大極

美 意 や 遠 へ 出 ぬ 桃 の 花 洞天

と 花 の 中 へ 桃 の 花 松竹

月 と 桃 花 の 中 へ 桃 の 花 芳英

折 口 の げ 中 へ 桃 の 花 水竹

幸 の 花 へ 似 合 へ 中 へ 桃 の 花 錦枝女

中 へ 桃 の 花 へ 中 へ 桃 の 花 林竹

紙 毎 中 へ 桃 の 花 へ 中 へ 桃 の 花 流定

桃 咲 け 神 の 中 へ 桃 の 花 一具

中 へ 桃 の 花 へ 中 へ 桃 の 花 寅年

桃

桃

柳

きりくといふ最も明く柳の風
之をちけし毎に驚き日柳哉
市井や柳からまきし柳の春
さしたる年思ひし柳の春
改換柳の池地防と柳の春
夕のそへ出さきく柳の春
馬籠へ本より柳の柳の春
まき柳の山路よりあきし柳の春
あきし柳の山路よりあきし柳の春
改換柳の池地防と柳の春

風 山 氷 托 一 鼎 確 由 大 玉
湖 外 孤 像 首 龍 額 誓 橋 圓

聖光

下 筋

重なるれと毎に驚くを柳の風
あきの柳子をけし柳の春
昔柳や葉の積まきし柳の春
柳をよきし折し柳の春
柳をよきし折し柳の春
柳をよきし折し柳の春

味 呂 一 庵 東 千
合 川 具 外 溪 輪

群老堀へもつてその声
とふつて柳葉木ハ昔に老堀

一 萬
具 居

下筋よりあきの柳の春
と柳の春何とあきし柳の春

由 托
誓 像

若草

ちとえや通るすまの池のふち
ら花何喰ふあかしくも生のしら
若草のや神の徳もあらうり
わの研のたのまうける然り哉
若草のやあまのりや若草のや
ワの草やまう切ひく玉の糸
若草のやいそつねをわかあまうし
わのそあまをわかあまうし
若草のや庵もくま世の人出入

若草 得 兼
連 派
戸 喚
双 鳥
由 誓
一 貝
大 旗
大 旗

桂

紅梅

日の中りか花のちひさき桂くす
わ引てそそり岬の桂くす
枝を花まんあんもあま桂くす
二ふりそそりりあま桂くす
里をそそりあま桂くす
程もそそりあま桂くす
そそり甲はそそりあま桂くす
一まのうすあま桂くす
事にはそそりあま桂くす

若草のしは花のちひさき桂くす
若草のしは花のちひさき桂くす

桂 同
水 和
一 果
寸 風
依 坂
水 竹
梅 室

若草 逸
若草 測

木 の 芽

紅松や 又さふ針子折るは
お松の太枝さうぬは付も元
お松押りさうぬ取く意の
何をもさふさふ松はさかす

池のふりごと流る木の芽
木の芽のほろも氣まされ
あ何い流る木の芽の白
摘もせもさうぬ芽
木の芽月極葉も表もあう
若虫を押のけてる木の芽

松 枝
大 松
千 松

史 子
玄 子
風 松
木 月
坑 甫
虚 白

蕨 の 身

莖 の 太

横うけまのまや蕨の
何もしもさふ蕨もさふ蕨の
蕨のさふ葉のちうわさ蕨の
蕨のさふもさふ蕨の
蕨のさふもさふ蕨の

おんれん中喰さおんれん莖
くくまやんのおけぬお松
莖さ中くくまやんの秋
くくまお松のさふもさふ

一 月
由 松
而 后
抱 俵
一 具

沙 崎
松 崎
呂 史
千 松

さうさうもさふのぬさうら 莖 子

茂 松

草

川越るくは時をすしれく
徳りんくさ草くあさく
金の草のくさく
湿葉草を枯渡く
草朴のけく
あさくあさの垣

女折
永保
市之
卓良
東漢

五

加木

徳も葉のくさく
あさくあさの垣

惟草
干輜

散草

たんちや中休く
提巻供

慈光

流りけやんあく

黄山

土草

下宛西真子つむ
はるくは時をすしれく
徳りんくさ草く
金の草のくさく
湿葉草を枯渡く
草朴のけく
あさくあさの垣

禾木
梅鳥
欽哉
沙鷗
砺山
千輪

木瓜

この子のそかゆき
木瓜の花
をきくのあさく

一具
梅草

芦角

芦の葉の通り糸や海へ

南出

接木

昔は木も竹のまじりけ
念入しとて何接木のひと下
飾りの接木とて何川彼と
且たすりともたれをそと接木我
自慢して強ひ接木の柄とて
お送や接木用をしのたをて
下りともたれをそと接木我

古翠 波同 鷹志 山外 雲清 祖々 由哲 卓池

菜摘

菜摘

菜

花

菜の老もまじりや 菜摘
此年らをもまじりや 菜摘
方丈の手拭もまじりや 菜摘
くまらや 年まじりや 菜摘
まじりや 菜摘
菜摘の唄もまじりや 菜摘

一具 多代七 徐翁 千粒 遠洲 雪慈

菜の菜の菜の菜の白ひき
菜の菜の菜の菜の白ひき
菜の菜の菜の菜の白ひき
菜の菜の菜の菜の白ひき

由菊 丁白 夜白 抱儀

種節

梅

某の夢やねねてなる華の傘
あの夢もよそふにあね盤乃元
某の夢乃もな枝つこもきつぬ
あの夢や一膳よそいぬせのつり

夢ありやこれとてなれ
群つてはくやまてり
群ありあそふは枝の夢

好物の美子とてや
梅さくは枝をひくそよ梅酒

梅の影をさそひては梅の影
はひて出く葉を押のけは梅の影
梅暖やひもよらき一生の面
もは枝や西刺門の春のりり
そこの来くはくは梅の影
なす伸ていふくは梅の影
おまハ一里も葉やもは花
あすのりりは梅の影

海棠

海棠の日にをきよとてや
海棠やねねるの言
かいさうの影のけをむる風式

主
梅
祖々
茶便

波
呼
露谷

車池
土
支

大梅
楓下
梅孫
支昇
得燕
心得
得所
抱儀

平
独
梅

連

翹

連翹や 阿使多うのひびき
生を元や 一里程の身 樹の舟
連翹や 折の隙と花のあ
まの翹小 漆くらしき 生を元

九把 右行 槐村 蒼吼

梨花

散とけいひや 一 梨子の花
甚うとくく 人合の 梨子の花
一本三月 一 一 梨子の花

若池 晴水 依美 若

虎状

再杖の 標う 持ち 此の 表

蒼吼

木蓮花

虎杖や 依ひり 赤の 赤の 知
思ひや 嘆中 たり 赤き 花
掃除 一 一 一 赤き 花

赤月 赤暎

青麦

青きもの 赤く 残ら 一 青麦を
青麦や 丁度 頃と 赤の 花
も 麦中 一 一 一 赤の 花

由哲 大極

苗代

苗代や 村の 赤の 橋の下
苗代や 与る 赤の 橋の下
終 中 赤の 橋の下

由哲 一 具 傍眺

山

苗代り滞りあはさるる南
苗代中すぬ水鏡を尋も
吾之山のくけりりり苗代田
苗代りをいふや且形寺
空をちんく山松又吾を麓うけ
虎杖のまはりあおるいふ
おとろくまけかきくわらひ
悦みれよまの山甲 麓折
把事まてあつふらき麓武
あつ折といふ路のまをいふ

古春 素元 南雪 卓池 一月 麓山 月暈 由指 松室

山花

あつ折といふ路のまをいふ

朱月 玉暈

藤

藤葉中をうとれぬ雨 糸
あつ折の中をうとれぬ雨
まけりてはぬまをいふ
夕めりの遊い連わり藤の
やとれ地へ布きさくく藤の毛
あつ折の中をうとれぬ雨
あつ折の中をうとれぬ雨
月のまはる藤の花やあつ折

多代め 葉靜 中誓 一映 鳩居 鳩子 子執

山吹

山吹中 花 是 心 上 山 的 井
 山吹 乃 第 一 水 氣 亦 有 字
 山吹 也 亦 有 字 亦 有 字 亦 有 字
 山吹 亦 有 字 亦 有 字 亦 有 字
 山吹 亦 有 字 亦 有 字 亦 有 字
 山吹 亦 有 字 亦 有 字 亦 有 字
 山吹 亦 有 字 亦 有 字 亦 有 字

一 有
 函 側
 甚 美
 逐 流
 舉 月
 一 具
 獲 如

了

了 之 意 亦 有 字
 了 之 意 亦 有 字
 了 之 意 亦 有 字

風 羽
 若 非
 松 傳

鶯

鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字
 鶯 之 意 亦 有 字

若 推
 沙 踏
 在 碑
 松 室
 未 水
 似 年
 叢
 万 族
 杜 蓼
 伯 老
 之 公

親 雀

子 親 雀 子 親 雀

子 親

尾 雀 雀 雀 雀 雀

野 巢

雀 雀 雀 雀 雀 雀

雀 雀

雀 雀 雀 雀 雀 雀

雀 雀

雀 子

雀 子 雀 子 雀 子

雀 子

雀 子 雀 子 雀 子

雀 子

雀 子 雀 子 雀 子

雀 子

雀 子 雀 子 雀 子

雀 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雉 子 雉 子 雉 子

雉 子

雲

雀

亦安きハ海の上よりハ切さうカ那
揚てかろこゆを空のゆとうら
高きハや揚るを空の空の先
何々うらゆや一日を舞いん
星も出くおるよおるおるを
気のおもく連り別をてびん
それさうにまてハ再直るをさか

真白 抱年 流芝 松秀 野菓 瞻在 蒼札

帰

雁

一むきとをねを流るや 帰る下
風きとくをを羽をいを帰る下
帰る下 帰る下 帰る下

ゆけをえりくるのゆや川へえ
ゆくテも飽て登降 池のふ
ゆけやをさしたる終る岸岸
田を買て標うらりかろつる下
厚の流表のをさきてををさ
元の田へおしてまろくまの下
大船り帆をてさや帰る下
帰る下見ゆるまろくまの下

乙子の飛きまろくまの所つる
下したるまの轉り体む乙子

大翠 極号 大松 極高 風朝 流芝 赤溪 千枝

大橋 林曹 而后

手
入る

蝶

ととをり入湖のまよふに
多きりりぬ帳付もあはらぬ
千帖

由雪

街通

多代の

抱保

山外

盛充

双鳥

共山

ひすくして一細まきや鏡の蝶
初蝶や 鳥の羽の 蝶
風より身を任せき 常々 草の蝶
初蝶や あ指の上も 又望ん
あえんつゝ 蝶の眼よ へくしり 和勢
あより 佳し 時にも 蝶の水の上
戸明老ハ 蝶の せきり せきり
別々々々 表して けいけい 蝶の 蝶
いゝも 蝶の せきり せきり 蝶

蝶ののり 舟の先 千 万 のうへ

厚なる せきり せきり せきり せきり

人あはれ せきり せきり せきり せきり

地あつち せきり せきり せきり せきり

海とて せきり せきり せきり せきり

响て せきり せきり せきり せきり

初蝶の 果を せきり せきり せきり

蝶の 葉の せきり せきり せきり

ちと せきり せきり せきり せきり

冬

岱年

千帖

阜地

茶蔭

黄山

阜地

阜地

惠光

得

得

紀 鋒 視

視

ちと せきり せきり せきり せきり

得

蛤

蛤やむいよ半は八俣しり
明桶やをかりせりしり

卓舟
東湊

田螺

送きぬりやよまむ出も四りしり
嘉波や田螺の明く表ある
子のふを先へるもや田螺賣
沖る船取より如くも田螺賣

而右
益山
山了
可也

子へ取く是のこもぬ 螺の車

卓池

蛙

蛙系へゆく 蛙のあき 蛙身
ときれく 可蛙の啼りて
色はれの家をよもや 蛙蛙
月半よも枯あやもてよもく蛙
尾のとれて余の思へるも蛙身
新蛙 蛙の 蛙の 蛙の 蛙の
蛙の 蛙の 蛙の 蛙の 蛙の
蛙の 蛙の 蛙の 蛙の 蛙の

小柳
大柳
月夜
言子
名竹
淡舟
出舟
千輪

蚕

おくれ蚕もあき 丹りたり 熟明り
去活りたり 娘の居別むる身
産産りたり 去るるるるる

年池
去子
潜

小 船

舟のつやが白くぬれぬる
 船のつやが白くぬれぬる
 船のつやが白くぬれぬる
 船のつやが白くぬれぬる

舟のつやが白くぬれぬる
 船のつやが白くぬれぬる
 船のつやが白くぬれぬる
 船のつやが白くぬれぬる

落 南 櫻 圃 佐保姫

落南のつやが白くぬれぬる
 落南のつやが白くぬれぬる
 落南のつやが白くぬれぬる
 落南のつやが白くぬれぬる

櫻圃のつやが白くぬれぬる
 櫻圃のつやが白くぬれぬる
 櫻圃のつやが白くぬれぬる
 櫻圃のつやが白くぬれぬる

佐保姫のつやが白くぬれぬる
 佐保姫のつやが白くぬれぬる
 佐保姫のつやが白くぬれぬる
 佐保姫のつやが白くぬれぬる

山 骨

む
支

死
ら
義
波

生
殊

左
義
長

綱
引

あるはあり人の出てあるむ月引
あふれの音 波 けり きむらきき
あ月の中 つつらうりの 杖 揮 條
あ月の末のあけしや 坪のうら
あ月の中 先那をかふる 友のふし

杜 鶯
木 本
大 柳
波 崎
やうあ

あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
きあふれの中 綱をえここの 重きとて
月 赤もも 思つとつちり 二月身
とつ 徒もも 意入 矢く 生る 二月哉

其 山
得 取
波 文
風 朝

あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
あ月の中 ちひさし 福る 山の毛

小 松
風 石
大 柳

あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
あ月の中 ちひさし 福る 山の毛

風 朝
大 子
大 紫

あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
あ月の中 ちひさし 福る 山の毛

風 朝
大 子
大 紫

あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
あ月の中 ちひさし 福る 山の毛
あ月の中 ちひさし 福る 山の毛

風 朝
大 子
大 紫

一 吳

霞

ゆきもあまの明もかきう車
二二大地をこけ是るま車
陽の町もきこゆをりたきみ
入社の一例くはかきんる
まををいぬてあまの海いそあ
をぬく浪きよきまぬ声は身
長橋のまぬあまのぬ人由り
ぬらきぬ風をまたむまを
遠きまのまもむくまを
沼あまの層をぬきぬてりか入ぬ
うたぬ海もあまのりまぬのまぬ

花
舟
帆
旭
九
如
水
灰
白
了
在
由
誓

朧月

あまの月もあまの明もかきう車
二二大地をこけ是るま車
陽の町もきこゆをりたきみ
入社の一例くはかきんる
まををいぬてあまの海いそあ
をぬく浪きよきまぬ声は身
長橋のまぬあまのぬ人由り
ぬらきぬ風をまたむまを
遠きまのまもむくまを
沼あまの層をぬきぬてりか入ぬ
うたぬ海もあまのりまぬのまぬ

舟
帆
旭
九
如
水
灰
白
了
在
由
誓

あまの月もあまの明もかきう車
二二大地をこけ是るま車
陽の町もきこゆをりたきみ
入社の一例くはかきんる
まををいぬてあまの海いそあ
をぬく浪きよきまぬ声は身
長橋のまぬあまのぬ人由り
ぬらきぬ風をまたむまを
遠きまのまもむくまを
沼あまの層をぬきぬてりか入ぬ
うたぬ海もあまのりまぬのまぬ

大
双
史
波
路
里
地

春

春をよむ 昔三飯の 春をよむ
浦風を 浪をよむ 春をよむ
春をよむ 春をよむ 春をよむ

卓池 雨堂 千款

酒

酒をよむ 春をよむ 春をよむ
夕の酒をよむ 春をよむ 春をよむ
酒をよむ 春をよむ 春をよむ

江山 鼎左 左城

暖

暖をよむ 春をよむ 春をよむ
春をよむ 春をよむ 春をよむ
暖をよむ 春をよむ 春をよむ

惟草 九紀 万道

焼野

焼野をよむ 春をよむ 春をよむ
春をよむ 春をよむ 春をよむ
焼野をよむ 春をよむ 春をよむ

一具 井智 丁出

山焼

山焼をよむ 春をよむ 春をよむ
春をよむ 春をよむ 春をよむ
山焼をよむ 春をよむ 春をよむ

一有 五指 赤翠 茂松 地保 千款

残雪

山里如 故きゆのち 枯ゆきを
かき出さし木の葉も落し 残る雪

下
小

春

雪

冬心置けりからき 春の雪
雪もたるとやをうし 春の雪
あふあふの雪 春の雪
雪の雪の雪 春の雪
雪の雪の雪 春の雪
雪の雪の雪 春の雪
雪の雪の雪 春の雪
雪の雪の雪 春の雪

後
文
由
白
着
東

雪解

春風

春風吹や吹のふりやう 少くして
春の風よ 春の風よ 春の風よ
春風吹や吹のふりやう 少くして
春の風よ 春の風よ 春の風よ
春風吹や吹のふりやう 少くして
春の風よ 春の風よ 春の風よ
春風吹や吹のふりやう 少くして
春の風よ 春の風よ 春の風よ

沙
今
春
西
抱
未
松
素
大

木

平池の類のありて水
さう方へ流れてはや春の
春の水あるある光をほれ
葉やうさふけたれは春の水

平池
波岡
石巻

水
ぬすむ

折ひ先等の子供やあま
あまむむはや河田へ魚の

才長
市枝

海
苔

海苔をよる葉やあま
惟松のふかき一さんの
終極や松は海苔の持ひ

山外
助宣
平山

子
餅

豊定やあまの
子餅やあまの
はる中や足利藩の

風詠
弄化
一具

糸
枕

いそぎ枕やあまの
糸枕やあまの

獲物
桐壺

陽

陽あまの木の松
陽あまの下一押の大川

狂類
草香

冬

あまの

悠

陽を中絶交する所のときん
かりうつうを介言はむ所大外

千輪

二日

逐ては隣し二日 亥少郡
画を去てても是れ二日 亥
門川年 不二のうつ 中二日 亥

左橋
並光
大天

七

午つ

初年より 市代さるに 博くお
まの午よはをさし 何の仲の略
初年和 海面へをい 門の向い
と川多や すと板橋の 浪を死

一舟
風橋
若非
夷則

彼

岸

山里より 舟の あり 彼岸 哉
宿るうし 中より と 住む ひとん ち
若る ぬれ け 猿も 彼岸 甲 人の 舟

善札
一甫
千輪

清忌

子供守り 子 孫を ぬれ とう 清忌 の 鐘
是の 瓜と ちく ます ち ち け 長 の 鐘

一具
形右

涅

槩

山を 中より 荒 壁を 掃き 人 係
呉の ちう ちう ち ち ち 一 涅 槩 係
ねん ち ち ち ち 何 の ち ち 意 出 け
本 係 ち ち ち ち 時 一 涅 槩 係

未木
祖々
旬元

西行忌

素具酒くたてりて終世無常
手もまじりの世のけりて涅槃像

惟車
幸々

是よきりてそつらう西行忌
と出よ志と業のそつら西行忌

由哲
東雨丸

永

日

永よりや等身てふまゝ
堪よりやいね好みのまゝ日永
さうももみ永きりを流の者
このまもむたえや流のり永くぬ
永よりや思ひのみよ流あし

風胡
去峰
仙峰
山外
風樓

出代

出代の出ひかきや
舟の伝より出代の庵も
出代の舟りり
出づりの枕のたて一よつら

卓池
蘭表
笠史
組郷

雛

雛もふの足あそ
そつらあのおてまつら雛身
中雛中花をなまし
雛のちをちて大ま月の上
とあつらふくあつら

風胡
出代
雀史
侍燕
芳文

鶏合

お茶さ〜〜〜煙りのとら〜〜〜籠うん
縁舟のや〜〜〜さ〜〜〜ひ〜〜〜あま
を〜〜〜子のつら〜〜〜まや籠の棚
ま〜〜〜れ〜〜〜さ〜〜〜籠の籠り
鳴〜〜〜の籠りあ〜〜〜るの籠
〜〜〜か〜〜〜まの舟のひ〜〜〜あ〜〜〜ん

大樹 波文 負襖 楓下 岳凡 山外 蓮宇 映 非

汐干

お茶さ〜〜〜の〜〜〜あま〜〜〜汐干
お茶さ〜〜〜の〜〜〜あま〜〜〜汐干
お茶さ〜〜〜の〜〜〜あま〜〜〜汐干
お茶さ〜〜〜の〜〜〜あま〜〜〜汐干
お茶さ〜〜〜の〜〜〜あま〜〜〜汐干
お茶さ〜〜〜の〜〜〜あま〜〜〜汐干
お茶さ〜〜〜の〜〜〜あま〜〜〜汐干
お茶さ〜〜〜の〜〜〜あま〜〜〜汐干

松竹 速瀬 茶幹 卓池 右表 東枝 千輪

長閑

お茶さ〜〜〜をあ〜〜〜てから〜〜〜る
お茶さ〜〜〜をあ〜〜〜てから〜〜〜る
お茶さ〜〜〜をあ〜〜〜てから〜〜〜る
お茶さ〜〜〜をあ〜〜〜てから〜〜〜る
お茶さ〜〜〜をあ〜〜〜てから〜〜〜る
お茶さ〜〜〜をあ〜〜〜てから〜〜〜る
お茶さ〜〜〜をあ〜〜〜てから〜〜〜る
お茶さ〜〜〜をあ〜〜〜てから〜〜〜る

由菊 鳥谷 壺天 波回

惜春

薄氷や やはらぎとて 春をいむ
跡新しき 春をいむ 心も春をいむ

文翠
信着
かま

行

喜

川も春や 身をいそぐ 舟橋の上
ゆき春や 身をいそぐ 舟橋の上

千
子
梅
木
舟
左
木
舟
子
孫

喜

昔の春のよきと 花のよきと 春のよきと
かき世の中 花のよきと 春のよきと

一
具
吟
霞
鹿
由
哲
丁
春
子
年
松
竹
春
見
梅
香
水
久

河形傳や人よわらむに松の
隙らうとまゝのささくや花の
隙らうとまゝのささくや花の
隙らうとまゝのささくや花の
隙らうとまゝのささくや花の
隙らうとまゝのささくや花の
隙らうとまゝのささくや花の
隙らうとまゝのささくや花の
隙らうとまゝのささくや花の
隙らうとまゝのささくや花の

卓也
松竹
逸淵
護物

古物
梁州大町越後屋
大伴定部

今人五五松花夕集

時鳥

夏之部

八雲東漢

涉驛千輪

軒技

麦の舟の舟もあしあしき
子親中の和歌出しあはれし
河和まのり飛らひ石をぬ杜行
松さししと田子人もあを部云
とまの甲の法有子初見塊
何る春折之ま風りあし
春のりりるの競やあしき
新云をりしつるやあしき

一序
鳳朗
虚白
玄子
岱雲
呂建
松儀
美礼

騙

幅

鞍

子

是ももあつて掃去を所とて身
ふつと風のつるをとも 堂

幅幅や土橋の裏をまわるとき
かきあつては逐てゆき行状や
辨幅甲すれぬをねる風の舟
くくわつて和ぬの橋をく門の口
掃幅也市才又くく門の橋

鞍の子の初もくくふくし理いさ
幅の子や舟の巻葉とつひりる

大橋
千輪

杉高
之岳
丁知
彼回
一肖

江月
小柄

枝蛙

毛虫

子子

丑

枝蛙の初もくくふくし理いさ
枝蛙言の初もくくふくし理いさ

毛虫すく先や毛虫のニツすて
毛虫すく葉のすく隙も毛虫

子子子子子子子子子子子子
子子のくく多却て隙もくく

丑の初もくくふくし理いさ
丑のくく大種すかきや丑のく
隣同士丑のくく多却て隙もくく

山形
燕尾

水瓜
太珉

梅高
五株

車池
野菜
米吳

虫より等しつゝぬきおや竹の奥
飛せのほむをわくくにおもをぬ
ゆりゆりの思ふ蚊龍や 雲一ツ

懐赤くまけし松より 斬くを
下りりり 其てくくく馬の腫
沸くきりり 赤く赤くぬきぬき
尾の尾 尾の尾 尾の尾
尾の尾 尾の尾 尾の尾
尾の尾 尾の尾 尾の尾

丁
一具
千輅

湖山
桐壺
卓池
虚白
董山

赤んや蚊の蚊ぬ里の蚊の音
尾の尾をめては蚊蚊よきれり
法華の海を赤く赤く赤く
きりり蚊の蚊くもきりり
尾の尾 尾の尾 尾の尾
尾の尾 尾の尾 尾の尾
尾の尾 尾の尾 尾の尾
尾の尾 尾の尾 尾の尾

以馬
梅家
知芝
洞天
芸非
漢高
其四
運源
得安
千輅

鹿の子

鳴るのひりめきう真しぬ松り襟
まじくともさせぬ位わや襟の声
せみ鳴り向敷の音かきこむ可なり
あからしうの茶もてはけぬ襟の夢
わらう摺をきゆそ飛ぶすぬの玉成
あたらう尻付とくむかの子のお
踏まきしうは尻はかきぬぬの子成
照らすうの子成はぬぬの子成
拍子の坪をう生をぬる席の子成

由留 苜合 千輪 席史 鳥谷 完摺 葦札 喜鹿 茂桂

打虫

更衣

兜をまきくすゝあるや打虫を
鳴るはまて通ぬ打虫を
まきくかきくすぬぬ打虫を

未月 風納 千輪

灸とえゝ具りぬぬぬ 更衣
灸とえゝ具りぬぬぬ 更衣

大抵 一函 卓池 土糸 抱儀 由留 末木 鹿

葵祭

足利の御成道御成道と葵祭の御成道
くらげの御成道御成道御成道御成道

葵祭
御成道

卯月

卯月の御成道御成道御成道御成道
卯月の御成道御成道御成道御成道
卯月の御成道御成道御成道御成道

卯月
御成道
御成道
御成道

さ

さの御成道御成道御成道御成道

さ
御成道

水世月

水世月の御成道御成道御成道御成道
水世月の御成道御成道御成道御成道
水世月の御成道御成道御成道御成道

水世月
御成道
御成道
御成道

夏花

夏花の御成道御成道御成道御成道
夏花の御成道御成道御成道御成道
夏花の御成道御成道御成道御成道

夏花
御成道
御成道
御成道

置らるるを御成道御成道御成道御成道

置
御成道

百本

打火とていふらんらん
新やうのいふおれてふま

祖々

蓮佛

蓮佛とていふ富子を及みし
蓮佛やを端へ寄り採の上
多きよりとていふ佛の存る家

盧白
節之
文昇

花寺堂

此こんの足取りあや花寺堂
極本居の悟依をねむ花寺堂
ふはあまふとも七生是なり
おとくハ又人のいしうや花寺

護物
得取
蓮依
台見

築紫

築紫とていふ取のつり物
築紫とていふれれ後いふんん
つり物かかかかかか男の子

得蕪
築金
幸舎

大矢

大矢の形して又とて若敷身
糸ありの形も通るや大矢身

蓮宇
遲流

短夜

みかゝ短や油も走すね極吊
短夜や油も走すね極吊川
うか秋の夜もかかや極視
ゆあき秋の夜もかかや極視

錦枝女
逸淵
照也
白樹

青

夏の夜や 明てりし 雲の 芳
経ぬ やらぬ 心より 籠り 花
みよ ぬき 念ふ ぬきの 心より
明あふ 木や 松の たちり ぬ

田所 下知
雀 豊
梅 室

麦

夢さしや 客よ ちり 納戸に
春さしや 月の ちり ちりの 物志し

曾見 二風

宮寺も 秋の 麦の 秋
梅さしや ちり ちり ちり ちり ちり
麦の ちり ちり ちり ちり ちり

由 哲
波 同
梅 史

新茶

冬用と ちり ちり ちり ちり ちり
ちり ちり 二色 ちり ちり ちり

由 哲
松 裡

鯨

さ 秋の 月も ちり ちり ちり ちり
梅 ちり ちり ちり ちり ちり ちり
一夜 ちり ちり ちり ちり ちり

一 函
波 同
号 元

松魚

夢さしや 向く ちり ちり ちり ちり
水 ちり ちり ちり ちり ちり ちり
梅 人よ ちり ちり ちり ちり ちり

位 年
姫 山
湛 石

鯛

多々入る地産するに多し柳
くわらわく客まがらふに魚も
信のよめて 連しぬま川 ころも
おまきく 又ゆりり初年 初年
とら 松魚素 買ふの人系 妙形

此より入及新ある 秘伝の事
活魚の度 試すま 不 活魚 不 新 試
持く 又其の 試す 毎の 鯛
億し とも 鯛の 思ふ 妙伝の 外
史の 明く 志を して 活魚 鯛の 元

白桂
二株
松玄

白桂
護物
塵白
山外
干船

阜池
水花
淡吉
多代め
甫川

幟

まをれハ 蘇り 又ゆりの あり ち
男とハ 志も 活魚 子中 妙伝
候 見 初 子ゆり なる 坂の上
ふき ぬん 中 活魚 妙伝 候 牙
町 舟 へ ひりき 妙伝 候 妙伝 妙伝

前 宿 中 下 茶 菓 きの けい 活魚 蘇
ふ 入 と 中 下 茶 菓 きの けい 活魚 蘇
と 活魚 中 下 茶 菓 きの けい 活魚 蘇

松玄
六禅
太老
波回
茶山

松玄
逸閑
阜池

粽

田 身 串 火 山

五山の田五丁をひらき種さるゝ
あつ四丁一まきを中をさるゝ

五丁 杉

重中へは種さるゝ火串を

芦 兄

足元のあり種さるゝ火串を

李 且

樹の幸火串をさるゝかきさるゝ

合 用

あつ四丁火串をさるゝ明を

種 物

種のあるありぬえを田植を

年 池

種さるゝ斜をさるゝぬ田植を

由 折

種さるゝ田中のあり種さるゝ

葉 折

早 乙 女 苗

早乙女は種さるゝ田植を
あつをさるゝ種さるゝ田植を

根 舌

早乙女の多枝をさるゝ種さるゝ

一 具

早乙女をさるゝ種さるゝ

根 五

早乙女の種をさるゝ種さるゝ

春 結

早乙女の種をさるゝ種さるゝ

声 枝

月細く種を種さるゝ種さるゝ

一 具

一つを種さるゝ種さるゝ

一 形

苗を種さるゝ種さるゝ

根 下

青田

山ありてまゝの枝のたぐさき若葉の
まやうらうら風のたぐさき早苗の
たぐさき若葉のたぐさき若葉の
若葉のたぐさき若葉のたぐさき
伸あつてくゝゝゝ若葉のたぐさき
何れもたぐさき若葉のたぐさき
綿のたぐさき若葉のたぐさき
風扇のたぐさき若葉のたぐさき
たぐさき若葉のたぐさき若葉の
若葉のたぐさき若葉のたぐさき

湖山 古先 林金 鳥津 蒼乳 意 風 月 宇 千 輪

田取

扇子

園扇

梅のたぐさき若葉のたぐさき
若葉のたぐさき若葉のたぐさき

花のたぐさき若葉のたぐさき
若葉のたぐさき若葉のたぐさき
若葉のたぐさき若葉のたぐさき
若葉のたぐさき若葉のたぐさき
若葉のたぐさき若葉のたぐさき

若葉のたぐさき若葉のたぐさき
若葉のたぐさき若葉のたぐさき
若葉のたぐさき若葉のたぐさき
若葉のたぐさき若葉のたぐさき

夫 翠 壺 白 氷 孤 玄 子 千 輪

梅 園 幻 外 庭 芝

紙帳

新中色をくく申結たうくあふふあふ
挿を客へさくくあふふあふあふ
ははそあの上あふあふあふあふ

蕉 素 五

夏 羽衣

初うけく薩持ふれ 華性身
起されあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

左 粗 文 味 苦 心

帷子

統持く帷子あふあふあふあふ

旭 例

祇園會

初定あふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

奥 藤 眞 英 暮
初 金 祇 火 律

雲の峰

あふあふの押あふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふ

龍 著 一 左 一
風 札 月 京 喃

氷室

暖くたる露のさかへんやさきの

そとまののんらよまよま氷の音
まらゆる葉さく氷室の積る身
あふ葉のまきむらやま氷

千粒

氷松
護物
逢添

富士

士詣

みりまのゆまきじし不三結
くの葉のちくあひなり不三結
月くりのあふさるえま不三結

由野
大勝
卓池

ふもや熱を感もくくくまら

沙路

るもの藤や西をくわめあは

石見

ひる

網の焼座は冷しそ空揺るぬ
空揺るし熱もあすそあひ

梅亭
千粒

土用

接ぐよとち中とのあし土用舟
何中ふとあし土用舟

漢島
依者
西本

出干

岩やふみか人字何ぞそ土用干
赤松垂しのけくはぬ土用舟
暖くあふ板を出出て土用干
吾干や本のいそ

山側
大奉
自越

一夜酒

ぬき人なりと云ふれど一板酒
待りまきし子八家美女つら

茶山 湖山

暑

うらみなりまをねこころ暑き
柄の産ぬきく涼なる暑き
寝の静きよく咽山あつさう
向の暑き程何の咀の元
大助子客といふと暑き
埃暑き名なきあつさう
身はくし扱はあつさう暑き

風帆 一函 景文 大翠 波文 史子 露泉

夕立

暑波屋の入り居る暑き
強ひけては世をゆるりつさ
門先よりまのあつさう暑き

山 市

夕立やと暑き先に出る水取
中つらもの程何さむちまの生
暗くつらもの夕立やけつ
あつさうの暑きあつさう
夕立やと暑き先に出る水取
中つらもの程何さむちまの生
あつさうの暑きあつさう
夕立の降つた

車池 大翠 抱依 花文 一函 重竹 由野

簞

ゆめをやはらぐはなをこころをいふ下
ふゆやまをさのうへへのけしふた
まをやはらぐはなをこころをいふ下
ゆめをやはらぐはなをこころをいふ下

意
可也
目見
千輪

魚のまぬ水まをこころをいふ下
木はのまぬ水まをこころをいふ下
年をさのうへへのけしふた
別髪の上をさのうへへのけしふた

車池
素魂
年緒
水并

竹

直人
竹のまぬ水まをこころをいふ下
月をさのうへへのけしふた

竹
月

反

月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた
月をさのうへへのけしふた

茶
下
下
下
下
下
下
下
下
下

打水

打水の爲におは嬉しむ。極清
赤水のり。さうさう。や。未。と。ま。り。

林昔
主河

瓜

くわ。くわ。瓜の。白ひや。板元
り。底。了。月。ま。つ。瓜。和。瓜。の。香。

一果
梅通

冷瓜

ちいさ。細。き。好。く。と。ま。和。冷。瓜
庭。丁。も。冷。し。て。ま。や。瓜。の。信。

小養
善北

沖鱈

喰。き。し。し。れ。を。入。る。沖。鱈
此。も。ち。の。さ。さ。さ。さ。を。沖。鱈。

江之
波回

清

水

子。供。等。の。根。葉。の。切。り。は。あ。か
さ。さ。さ。さ。香。嬌。し。き。扱。つ。清。水。也
是。厚。く。い。ぬ。さ。さ。も。た。手。足。の。清。水
飲。く。ま。士。の。ま。ま。あ。る。ま。さ。ら。の。水
村。外。の。り。は。す。し。し。ま。ま。ら。の。ま
い。さ。さ。さ。い。ぬ。さ。さ。や。井。の。清。水
さ。さ。さ。と。海。は。さ。さ。さ。の。清。水。う。水
戸。櫃。と。け。て。四。の。あ。う。色。は。清。水。也
清。も。ま。ぬ。人。の。ま。ま。う。苦。志。と。り
も。さ。さ。さ。さ。さ。さ。清。水。も。清。水。也

車池
袋手
風洞
一西
向
夷利
圭市
由甫
林昔

葛水

葛水や 生るつきの鳥ついで
幾多の 又葛水の 池をうら

相三

晒井

さしおや 葉をてきくまの 後
片らしお池一りたれる 樹の 幸

律石
禾木

夏

瘦

夏夜の 月をふりや 海をく
あつた夜や くらとくらとくさる 角力取
高き夜や 業輝を 似るる 葉あひの

最支
左城
右兄

小舟

川舟や 花堂の 舟をふむ

由柳

秋

近

むらさき瓜の 差んて 秋近し
秋をくあつたや 杉風 萩の 幸
秋近し 寺の 藪とけり 井の 森
秋ちのき 徳持や 徳を 元はじ

一具
紫峰
古眼
禾木

津

板

津のけし 神や 津板の ちきり物
あつた板や 津板の 終も一 凍
新田の ちきり 津板の 津板 身
若柳 津板の 投り 津板 川

茂権
九氣
一眉
甚豊

津板の ちきり 津板の 津板 身

千結

茅の端

誦、味も此邊よりいふ茅の端は
中と先より何と何と云ふちのこゝを
要する、竹の端ある茅の端は

風引
松隈
土子

若葉

法橋ふりり又そとより若葉は
境内の畦わりのとりのえお那
何よりさうり節採も若葉身
その柄も若葉は若葉し若葉葉
採ふよさをうりつりこの葉は
とれたりの採れ採る若葉は

杜有
由節
和光
風引
若葉

葉

櫻

たよりとりの若葉は柳の葉
とさうさうり節と若葉のつりりか
あつりし若葉は若葉のつりりか
とうとめぬ若葉の若葉は若葉身
若葉の邊をさうり節のつりりか
あつりし若葉は若葉のつりりか
とさうさうのあつりし若葉は若葉
若葉は若葉のつりりか若葉は若葉
んとさうり節は若葉は若葉は

斗道
丁知
大松
松高
かちめ
迷洞
若葉
操兄
東漢

葉は若葉は若葉は若葉は若葉は
葉は若葉は若葉は若葉は若葉は

風引
一具

新 楓 美 樹

其を備まきり穿つてわら楓
 りの飛 赤ふのきめふと逢かぬ
 糸うらふらふ起て面衣の若楓
 美久して庭をむらも木きりて
 滝の畔もさうり字ゆる新樹の
 色とけを濡れまを新樹の
 河中つちと楓洗ふ 志きりて
 着るうら庭ゆく風の 楓つき

美 推
 九 起
 波 回
 千 糸
 糸 行
 四 風

木 心 心 心

木 心 心 心

あもも中てあもも新樹の志きりて
 葉の片のあてさきけさきりて
 かし家の中て葉うらめ志きりて
 踏とてててつと程止をさきりて
 あもも中てあもも新樹の志きりて
 海へあもも中てあもも新樹の志きりて
 人あもも中てあもも新樹の志きりて
 鳥眼へあもも中てあもも新樹の志きりて
 あもも中てあもも新樹の志きりて

抱 像
 水 外
 而 后
 風 帆
 悠 々
 江 月
 山 落
 心 行

夏
本
立

夏一の村にて夏や夏本立
水くけし夏柳より夏本立
夏吹く花も夏や夏本立

夏一
本立

常
葉
本
葉

常葉本の常葉本やし建ち寺
お身の西陣る松の常葉本
二三つ常葉本ありて散れ

常六
常山

桐
花

一里をゆくまの松や桐の花
お身の西陣る松の桐の花
桐もまの松や桐の花

一桐
桐下

葉
の
花

葉の花
葉の花
葉の花

葉花
葉花

葉
柳

葉柳
葉柳
葉柳

葉柳
葉柳

抽
花

抽の花
抽の花
抽の花

抽花
抽花

夏七

喜

梅

計年の何處にあり花梅本

まき梅の花をむやみのうすひ
井の根のまきも本うこむれ梅
まき梅うすまきしふちこころ

未
月
五

棟

まき梅うすまきしふちこころ
まき梅うすまきしふちこころ
まき梅うすまきしふちこころ
まき梅うすまきしふちこころ

大
得
火

栗
花

りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ

大
車
池

合
款

花

りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ

曲
枝
木

霞

子

りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ
りり色うすまきしふちこころ

未
完
小

栞花

さきかき大木より小栞は栞花の花
散るうつら時より和若ゆきのさか

連珠
下如

栞花

寺々かき露もささるる栞のり毛
栞の花ちとや地はぬく徑つと息
言を結みかよわちく栞の茶
津面の初地も若くえうたの茶
二三片々うも後うく栞の茶

一省
栞
得
由
水
谷

百
日紅

中くうちと色もを二ふり
百りおちつたふ川の生るう柳

羊
文

葵子花

栞花のささるるうもれり
とるかかつり強きうかふらさ
うたのささるるかよひて静さる
栞茶葉を利よりついでりか
焼火のきりのぬえあし 葵子花
寺々かハち和冷けや 杜若
涼風のさ吹を庭やうたつと
長年の倒れし中ち栞は城
代りまよひる日さかぬ葵子花
中ちつまらえんまきや 杜若
栞のささるるうもれり

在翠
抱儀
鹿白
一具
奎以
太橋
栞通
也剛
風相
由柳
栞志

牡丹

牡丹の花はさかたさかたせむるを牡丹の花
あつちり〜と〜と〜と〜と牡丹の花
日さすけてゆり〜と〜と牡丹の花
物さすり〜と〜と牡丹の花
息のい〜と〜と牡丹の花
一〜と〜と牡丹の花
〜と〜と牡丹の花
〜と〜と牡丹の花

素行 牡丹 卓即 得眠 運派 曲哲

芍薬

芍薬

芍薬

牡丹の花はさかたさかたせむるを牡丹の花
芍薬をさかたせむるを芍薬の花

牡丹の花はさかたさかたせむるを牡丹の花
芍薬をさかたせむるを芍薬の花

牡丹の花はさかたさかたせむるを牡丹の花
芍薬をさかたせむるを芍薬の花

牡丹 芍薬 卓即 得眠 運派 曲哲

如の花

子菰

如の花や物事の...
如の花や物事の...
如の花や物事の...
如の花や物事の...
如の花や物事の...

菰子持て呼...
菰子持て呼...
菰子持て呼...
菰子持て呼...
菰子持て呼...

由誓
大梅
湧瀧
木

何望
松通
沙路
卑池
套机

淡花

菰

菰子持て呼...
菰子持て呼...
菰子持て呼...
菰子持て呼...
菰子持て呼...

菰...
菰...
菰...
菰...
菰...

林曹
大老
一具
松意
子机

月想
何雲

伝書
ふふ

朱乃子

朱乃子を搗て煮るや湯を
朱の子を煮て煮るや湯を
朱の子や煮るや湯を
朱の子を搗丹湯や人たより
朱の子や一掴いちお入るより
朱の子を煮るや湯を
朱の子を煮るや湯を
朱の子を煮るや湯を

節 逸 淵 梅 室 蓬 干 蓬 湯 眉 山 東 漢

茄子

柴をわけて煮るや湯を
柴をわけて煮るや湯を
柴をわけて煮るや湯を
柴をわけて煮るや湯を
柴をわけて煮るや湯を

九 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

空豆

空豆を煮るや湯を
空豆を煮るや湯を
空豆を煮るや湯を
空豆を煮るや湯を
空豆を煮るや湯を

月 底 粗 文

小豆

小豆を煮るや湯を
小豆を煮るや湯を
小豆を煮るや湯を
小豆を煮るや湯を
小豆を煮るや湯を

水 休 得 菘

百合

百合を煮るや湯を
百合を煮るや湯を
百合を煮るや湯を
百合を煮るや湯を
百合を煮るや湯を

其 則 有 未 物 物 物 物 物 物 物 物 物 物

紅花

橘... 紅花... 橘... 紅花...

紅花... 橘...

夏葉

橘... 夏葉... 橘... 夏葉...

夏葉... 橘...

撫子

橘... 撫子... 橘... 撫子...

撫子... 橘...

橘

橘... 橘... 橘...

橘... 橘...

著莢

橘... 著莢... 橘... 著莢...

著莢... 橘...

晝

顔

橘... 晝... 顔... 橘... 晝... 顔...

晝... 顔... 橘...

か
く

松の枝りくさくさ花を咲かす
くさくさの花やまきくさの草の才

一
錦

紫
陽
花

紫陽花や水や池やある湖の上
あまのうみや 阿つきあしはの水
紫陽花やとれうまの 色あま
あまのうみやの 透てしきう 境垣

一
倉
彦
彦

夕
顔

夕顔や花を咲かすてはやと
中の顔やと花の元の 水垣

一
太
目

藤
花

藤の花や花を咲かすては
もはたさすつとくさくさ 網の色

一
風
柏
護

洋

水あまの 花の咲りや 白き花
洋や花の 花の咲りや 白き花
くさくさや 花の咲りや 白き花

一
若
花

葉

葉の蓮の花を白く染めたる
葉のや語を起すは一あるも
庭深き蟻鳴りて葉の音を
蓮は一く河に風を運ぶ
掉りたる風情よあらば葉は毎
々海に流れてゆく葉の音を
花の気養丸は葉のにおほれり

新池より四五枚蓮の葉葉を
まきのよのちとけて葉の音を

由 下
在 叟
五 吳
葉 金
相 我
葉 便
卓 重
郎

沈

林

石

釣
忌

和

十

沈むや若柳はし田の多り
海原や浅まきこのまの光

石葉よりさしと月の中
あふる石葉は中らあふる

庭よりし風の音なりやうまのふ
枝まんと家の石とや石ま

葉の中や影くくをまき葉の音

葉の中や影くくをまき葉の音

沈物
千 終

去 曼
一 了

釣 願
去 石

山 樹
小 柯
池 心



Handwritten characters in black ink on a rectangular piece of aged, yellowish paper. The characters appear to be '今' (today) and '手' (hand), possibly forming the name '今手' (Imate).

Large, faint, and mostly illegible handwritten characters in black ink on the right page. The characters are scattered across the page, with some appearing to be '手' (hand) and '今' (today), possibly repeating the name '今手'.

ゆき	平四早	平五	平六	平七	平八	平九	平十
木屏	平五木の夏	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
木の子	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
虫	平七	平八	平九	平十	平十一	平十二	平十三
秋の機	平七	平八	平九	平十	平十一	平十二	平十三
心	平七	平八	平九	平十	平十一	平十二	平十三
世	平七	平八	平九	平十	平十一	平十二	平十三
晴	平七	平八	平九	平十	平十一	平十二	平十三
旭	平七	平八	平九	平十	平十一	平十二	平十三
冬	平七	平八	平九	平十	平十一	平十二	平十三

古人五言歌 冬之部目錄

降りの部

神楽

平五

平七

平九

平十一

冬

平四

平六

平八

平十

水

平六

平七

平八

平九

時休之部

秋

平八

平九

平十

平十一

冬

平九

平十

平十一

平十二

子

平十

平十一

平十二

平十三

里

平十

平十一

平十二

平十三

平十四

見 ぬ 面

愛知のし人 愛知のし人
 喜ぶらうとて 喜ぶらうとて
 家人とあまひに 家人とあまひに
 蜀黍の葉をまき 蜀黍の葉をまき
 川原の草をまき 川原の草をまき
 麻の葉をまき 麻の葉をまき
 木の葉の影をまき 木の葉の影をまき
 海川の道を通り 海川の道を通り

尚白 畧貴 執人
 西条氏 杉代 文考 文考

ぬ

人の心を 人の心を
 愛知のし人 愛知のし人
 喜ぶらうとて 喜ぶらうとて
 家人とあまひに 家人とあまひに
 蜀黍の葉をまき 蜀黍の葉をまき
 川原の草をまき 川原の草をまき
 麻の葉をまき 麻の葉をまき
 木の葉の影をまき 木の葉の影をまき
 海川の道を通り 海川の道を通り

尚白 畧貴 執人
 西条氏 杉代 文考 文考

沙

三

左の由をむかひに木のあまを
孫系神と月をなまめ神の
そりてゆく二言のまね
又も人もまねてぬのうら
細き糸のてびのうらや沙の

沙
中沙
素沙
河沙
木固

何事のそりてにも似て三の
三のぬの糸をまねて
うすくとまねてまねて
まねてまねてまねてまねて
まねてまねてまねてまねて

三
中三
素三
河三
木固

終

終の由をむかひに木のあまを
孫系神と月をなまめ神の
そりてゆく二言のまね
又も人もまねてぬのうら
細き糸のてびのうらや沙の

終
中終
素終
河終
木固

十の由をむかひに木のあまを
孫系神と月をなまめ神の
そりてゆく二言のまね
又も人もまねてぬのうら
細き糸のてびのうらや沙の

十

十の友 海の家

いさよびやあしうはあきく夜のかを
句独よひさうふのあきくうの
いさよびを雲の宿もあきくは
十のあやあきのほきく人子思
いさよびや一程うさうさ一程
疎の代はあきくあきく十のあ
本曾乃之使も十のあきくあきく
いさよびのあきくあきくあきく
あきくあきくあきくあきくあ
あきくあきくあきくあきくあ
あきくあきくあきくあきくあ

大志来
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく

星の夜

あきくあきくあきくあきくあ
あきくあきくあきくあきくあ

あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく
あきく

七 又 七 琴 立

昔の船中より秋を思ふに
毎の暮るに花の影を思ふ
秋の夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ

菊 中
松 中
山 中
千 中
乙 中
乙 中
乙 中

七 又 七 琴 立 川 七 撥 替 領 心 系

大いなる船中より秋を思ふ
昔の船中より秋を思ふ
毎の暮るに花の影を思ふ
秋の夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ
夕暮の影を思ふ

此 中
嵐 中
木 中
康 中
乙 中
乙 中
乙 中

千 蘭 方 四

棋 待

打 言 筆

合意しつゝを結ぶと云にありけり
ふかあつといふりしかき物をも
つるふとの瓜喰ふふとのつまか
らふ人の中水のまきふまき

松林ゆえのさかたのゆき
かたしつゝのつり人を心く
まきまは也松林の境目

ふかあつを筆を物くさす
ふかあつを筆よりふかあつを筆
つらふを筆にてつらふを筆
ふかあつを筆のまきふまき

播子

白空

馬臺

甲第

鳴風

傍似

林心

赤那

探心

地皮

長布

岩心

赤心

赤心

赤心

赤心

赤心

赤心

赤心

赤心

竹 葉 正 送 中

竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より

竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より

竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より
竹葉のつらふを筆より

長布

岩心

赤心

赤心

赤心

赤心

赤心

赤心

赤心

赤心

墨

流

生

身

光

金

丸
お

家も皆扶子志の後の墨系
又一人も孫子と称つて之を系
而流を流の稱や墨系とて
灯の墨の如き墨系は世に

生身魂の如きもの如き
世あて急の身より生身魂
たよりあらうて生身魂
かよと生身の如きもの

流とて生身の如きもの
生身の如きもの如きもの
生身の如きもの如きもの
生身の如きもの如きもの

以弱

去来

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

痛

丸
お

痛とて生身の如きもの
生身の如きもの如きもの
生身の如きもの如きもの
生身の如きもの如きもの

生身の如きもの如きもの
生身の如きもの如きもの
生身の如きもの如きもの
生身の如きもの如きもの

其角

舟子

舟

捨

神

舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を

其角

小春

舟元

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

費

舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を

舟子

木

取

田

晚
瑞

本結して竹野の山をこの雲
小助のさる取神のぬらぬら
結のふ本結を結るはゆら
結のふ本結を結るはゆら
結のふ本結を結るはゆら

結のふらを結か
結のふらを結か
結のふらを結か
結のふらを結か
結のふらを結か

其の
一
二
三
四
五

文彦
文彦
文彦
文彦
文彦

焼

神

送
岸入

神

焼
焼
焼
焼
焼

神
神
神
神
神

送
送
送
送
送

神
神
神
神
神

其那
其那
其那
其那
其那

其那
其那
其那
其那
其那

其那
其那
其那
其那
其那

八 鞠 通 約 壽 約

八鞠の歌のたゞと一鞠の歌
 をつとく和歌のよも徳のよ
 い鞠に鞠の足をかきさけり
 いはく和歌の志のよあはせに

八鞠も徳のすくはし鞠も
 鞠のよも徳のよも徳のよ
 の取も徳のよも徳のよ
 一の戸に衣のよも徳のよ
 鞠のよも徳のよも徳のよ
 鞠のよも徳のよも徳のよ

許六
 雲九条
 七
 七
 七

許六
 雲九条
 七
 七
 七

紋 生 号

水 江

鳴 子

礼の事はなすもあはれ
 屋を鳴子もあはれ
 徳のよも徳のよも徳のよ
 山女やあはれもあはれ

水江の事もあはれ
 水江の事もあはれ
 水江の事もあはれ
 水江の事もあはれ

鳴子の事もあはれ
 鳴子の事もあはれ
 鳴子の事もあはれ
 鳴子の事もあはれ

松平
 牛久保
 七
 七

水江
 七
 七

鳴子
 七
 七

山子

此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり

山子 柳北 大草 破雲 柳北 支考 延放 子孫

引板

有

能

此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり

此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり

此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり
此の山を登りて極ゆるき山あり

引板 延放 支考 柳北 大草 破雲 柳北 山子

有 延放 支考 柳北 大草 破雲 柳北 山子

能 延放 支考 柳北 大草 破雲 柳北 山子

第

新本伝説のついでに、中世の世に於ては、
久きもの多しといふべし。此の世に於ては、
新代の果安を信し、かくも世に果

又
防
白

神

おの神や、中世の世に於ては、
神を信し、神代の言の神を信し、
古の言の神を信し、
神を信し、神を信し、
神を信し、神を信し、

神
神
神

神

神を信し、神を信し、
神を信し、神を信し、
神を信し、神を信し、
神を信し、神を信し、
神を信し、神を信し、

神
神
神

河

河を信し、河を信し、
河を信し、河を信し、
河を信し、河を信し、
河を信し、河を信し、
河を信し、河を信し、

河
河
河

鏡

鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、

鏡
鏡
鏡

鏡

鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、

鏡
鏡
鏡

鏡

鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、
鏡を信し、鏡を信し、

鏡
鏡
鏡

漸 朝 夜 寒

朝の暁に空より雪が降る
 夕の暮に空より雪が降る

雪の降る姿は
 静かに降り積る
 静かに降り積る

入道の子は
 雪の降る姿を
 静かに降り積る

雪の降る姿

静かに降り積る

静かに降り積る

静かに降り積る

雪の降る姿

静かに降り積る

静かに降り積る

静かに降り積る



雪の降る姿は
 静かに降り積る
 静かに降り積る

雪の降る姿
 静かに降り積る
 静かに降り積る

雪の降る姿
 静かに降り積る
 静かに降り積る

新 橋 湯 酒

此酒の味は新橋の酒に
 似たり。新橋の酒は人の
 心を酔かし。新橋の酒は
 人の心を酔かし。新橋の
 酒は人の心を酔かし。新
 橋の酒は人の心を酔かし。

其の
 味は
 新橋
 の酒
 に似
 たり

新 橋 湯 酒

此酒の味は新橋の酒に
 似たり。新橋の酒は人の
 心を酔かし。新橋の酒は
 人の心を酔かし。新橋の
 酒は人の心を酔かし。新
 橋の酒は人の心を酔かし。

其の
 味は
 新橋
 の酒
 に似
 たり

引寄 物 数

一、引寄本籍の物
 二、引寄他籍の物
 三、引寄他籍の物
 四、引寄他籍の物
 五、引寄他籍の物
 六、引寄他籍の物
 七、引寄他籍の物
 八、引寄他籍の物
 九、引寄他籍の物
 十、引寄他籍の物

引寄 物 数

一、引寄本籍の物
 二、引寄他籍の物
 三、引寄他籍の物
 四、引寄他籍の物
 五、引寄他籍の物
 六、引寄他籍の物
 七、引寄他籍の物
 八、引寄他籍の物
 九、引寄他籍の物
 十、引寄他籍の物

一葉 柳 歌

一葉をし水や相のあまきり水
打つたをぬきい相の二葉あひ
相の葉も内り葉かじし井戸のま
たぐの葉をぬきも中に響あはせ
西風の柳のすすくもこ葉あひ

葉のちうて中かろま柳汁
ちを影に打あつる葉やちを柳
形やうらぬ又ゆくの柳葉
ちをゆき一葉し色あはれき
ちを結る柳をちまうぬるりか

尚分
明え
結え
響了
る破

ちを風
吐けろ
糸上
柳を
印明

草 九 花

草のちうて花のちうてか
草のちうて花のちうてか
草のちうて花のちうてか
草のちうて花のちうてか
草のちうて花のちうてか

草
花
草
花
草
花

女 弁 花

女弁花のちうて花のちうてか
女弁花のちうて花のちうてか
女弁花のちうて花のちうてか
女弁花のちうて花のちうてか
女弁花のちうて花のちうてか

女
弁
花
女
弁
花

木 橙

木橙の皮を剥きしものかきし
最上も法も此の木橙より
多きをうけて折して之を
切只子粉の世も切きと云
味もさるる物なりつゝ
橙の圃の中にはさきく木橙
此の木の春もほろりて
此の木の皮を剥きしもの

木橙 山岳 梨 石 木

甘菊

甘菊の皮を剥きしもの
甘菊の皮を剥きしもの
甘菊の皮を剥きしもの

甘菊 山岳 梨 石 木

紫 子

紫子の皮を剥きしもの
紫子の皮を剥きしもの
紫子の皮を剥きしもの

紫子 山岳 梨 石 木

大 豆

大豆の皮を剥きしもの
大豆の皮を剥きしもの
大豆の皮を剥きしもの

大豆 山岳 梨 石 木

豆 油

豆油の皮を剥きしもの
豆油の皮を剥きしもの
豆油の皮を剥きしもの

豆油 山岳 梨 石 木

男

男の皮を剥きしもの
男の皮を剥きしもの
男の皮を剥きしもの

男 山岳 梨 石 木

志す客もあやまらば秋のつゆのひ
秋の空のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ

白
去来
牛の車
糸糸
えええ
柳片
冬枝
るり
魚流
去来

秋

秋凡のいそがしきも秋のとも
地元のそと外にわけてはのとも
あじわくのうたもきり秋のおと
あじわくのうたもきり秋のおと
あじわくのうたもきり秋のおと
あじわくのうたもきり秋のおと
あじわくのうたもきり秋のおと
あじわくのうたもきり秋のおと
あじわくのうたもきり秋のおと
あじわくのうたもきり秋のおと
あじわくのうたもきり秋のおと

去来
白
糸糸
えええ
柳片
冬枝
るり
魚流
去来

秋

あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ

去来
白
糸糸
えええ
柳片
冬枝
るり
魚流
去来

撒 畫 九 龍

けしらの世ありあけく於龍のふ
らふまのふもくわたり龍のふ
ゆしらのふもくわたり龍のふ
狩所のふもくわたり龍のふ
林風やうらふもくわたり龍のふ

まろくてもあつていふをな平子

龍のふは世せりしをわたり
ふもくわたり龍のふ
るけしていふもくわたり龍のふ
る龍のふもくわたり龍のふ

玉子
山子
ふもく
ふもく
ふもく

龍
まね
形彼
木子
字不

糸 八

瓢

糸を縁かき糸を糸を糸を糸を
糸を糸を糸を糸を糸を糸を

瓢のふもくわたり瓢のふ
瓢のふもくわたり瓢のふ
瓢のふもくわたり瓢のふ
瓢のふもくわたり瓢のふ
瓢のふもくわたり瓢のふ

長
ひ
ひ

瓢
瓢
瓢
瓢
瓢
瓢
瓢
瓢
瓢
瓢

蓮の
実

蓮の葉や花は堆の山や川に
てつものうらなはるる花より

株
花

蘭

蘭の葉は花より下りて
らよの葉は花より下りて
花より下りて花より下りて
花より下りて花より下りて

株
葉
花

そ
た

そたは花より下りて
花より下りて花より下りて
花より下りて花より下りて
花より下りて花より下りて

株
葉
花

花

葉

枝

花の葉は花より下りて
花より下りて花より下りて
花より下りて花より下りて
花より下りて花より下りて

株
葉
花

枝の葉は花より下りて
花より下りて花より下りて
花より下りて花より下りて
花より下りて花より下りて

株
葉
花

紫苑

薄

志あるの成程... 年くれば... 花の... 鹿... 船... 舟... 舟... 舟...

其... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

紫苑

世... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

葉

川舟のこりし風をよめるの
おとよびて船ゆく葉の
はるの枝のまじくまの
舟のわらわをよめる

龜形
おとよ
はる
舟の
わらわ

葉

葉のまじりて舟の
おとよびて船ゆく
はるの枝のまじく
舟のわらわをよめる

舟
おとよ
はる
舟の
わらわ

葉のまじりて舟の
おとよびて船ゆく
はるの枝のまじく
舟のわらわをよめる

二名
おとよ
はる
舟の
わらわ

尾

末

尾

家の神を招き入るる尾尾尾
ひびくは経末の尾尾尾
ひびくは経末の尾尾尾
ひびくは経末の尾尾尾

出結市馬も賑々しく何れも
ころ秋の節の尾尾尾
ころ秋の節の尾尾尾

結市や尾子引合の尾尾尾
結市や尾子引合の尾尾尾

尾尾
尾尾
尾尾

尾尾
尾尾

尾尾
尾尾

尾

尾

尾

結市や尾子引合の尾尾尾
結市や尾子引合の尾尾尾
結市や尾子引合の尾尾尾

結市や尾子引合の尾尾尾
結市や尾子引合の尾尾尾

結市や尾子引合の尾尾尾
結市や尾子引合の尾尾尾

尾尾
尾尾
尾尾

尾尾
尾尾

尾尾
尾尾

芋

芋の葉は肉を食すのやきやゆ
ゆめりかゆらぬやきやゆ
山畑の芋はあつたけは
つきの葉は肉を食すのやきやゆ
子を食すは芋様を食すは芋

草

草の葉は肉を食すのやきやゆ
草の葉は肉を食すのやきやゆ
草の葉は肉を食すのやきやゆ

花

花の葉は肉を食すのやきやゆ
花の葉は肉を食すのやきやゆ
花の葉は肉を食すのやきやゆ

木

木の葉は肉を食すのやきやゆ
木の葉は肉を食すのやきやゆ
木の葉は肉を食すのやきやゆ

木の葉

木の葉は肉を食すのやきやゆ
木の葉は肉を食すのやきやゆ
木の葉は肉を食すのやきやゆ

葉

葉は肉を食すのやきやゆ
葉は肉を食すのやきやゆ
葉は肉を食すのやきやゆ

板

板は肉を食すのやきやゆ
板は肉を食すのやきやゆ
板は肉を食すのやきやゆ

海

山

舟

考

十

足

尚

陸

陸

舟

舟

舟

舟

舟

舟

舟

舟

舟

秋の情

秋の学

秋の擲

秋の政

悲しき心を述ぶ秋の情
其の如き心は秋の情
秋乃陰邪何れも神と云ふは

秋の白茅の如き如き如き
雲や雨や雪や秋の情

秋の擲は身を以て
一の心を以て擲る如き

秋の政は身を以て
秋の政の如き如き

秋の情の如き如き
秋の情の如き如き

秋の情 秋の学 秋の擲 秋の政

秋の情の如き如き
秋の情の如き如き

秋の情

秋の学

秋の擲

秋の政

秋の情

秋の情

野

野の月の今や暮れど時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらわさるる時
思ふすもいづも森の
水は流れてはくちあしくし
さうさうと時草の心も打り
さうさうと心も打り
あうさうと心も打り

野
支考
時化
山
山
山
山
山

野

野の月の今や暮れど時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらわさるる時
思ふすもいづも森の
水は流れてはくちあしくし
さうさうと時草の心も打り
さうさうと心も打り
あうさうと心も打り

野
支考
時化
山
山
山
山
山

野

野の月の今や暮れど時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらわさるる時
思ふすもいづも森の
水は流れてはくちあしくし
さうさうと時草の心も打り
さうさうと心も打り
あうさうと心も打り

野
支考
時化
山
山
山
山
山

野

野の月の今や暮れど時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらわさるる時
思ふすもいづも森の
水は流れてはくちあしくし
さうさうと時草の心も打り
さうさうと心も打り
あうさうと心も打り

野
支考
時化
山
山
山
山
山

野

野の月の今や暮れど時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらわさるる時
思ふすもいづも森の
水は流れてはくちあしくし
さうさうと時草の心も打り
さうさうと心も打り
あうさうと心も打り

野
支考
時化
山
山
山
山
山

修

集

集

修のく和臨持りしものを以て
又中の和はあはれいすのや
ゆいゆいに修めくまふ山あう
修のく和臨持りしものを以て

集のく和臨持りしものを以て
又中の和はあはれいすのや
ゆいゆいに修めくまふ山あう
集のく和臨持りしものを以て

集のく和臨持りしものを以て
又中の和はあはれいすのや
ゆいゆいに修めくまふ山あう
集のく和臨持りしものを以て

修書
用研
之書

修書
用研
之書

修書
用研
之書

修

集

修のく和臨持りしものを以て
又中の和はあはれいすのや
ゆいゆいに修めくまふ山あう
修のく和臨持りしものを以て

修書
用研
之書

秋もをゆく川くまのまの
秋もをゆく川くまのまの
秋もをゆく川くまのまの
秋もをゆく川くまのまの
秋もをゆく川くまのまの

酒
酒
酒
酒
酒

古人多百歳後白集

あくら部

南 嶺 行 白 集 瓜 抄 校 合

神 靈

神をわらふ神のまのまのまの
神をわらふ神のまのまのまの
神をわらふ神のまのまのまの
神をわらふ神のまのまのまの
神をわらふ神のまのまのまの

芭蕉
其角
柳
明
子那

取敢

いりたしき事ありぬの捨つる
新所をさしむるを待む玉あり
ちりまゝてねぬ地りし物か
新の及のうはさかあしあ
扶の愛おのほろしあふ金
兵のうは外の前もむ七思の
切あしきあつるや照れ
捨指のまふのあしきに
掃りすまふ事書に文も
場あしきまふのうはあ
新同子捨風をぬきま
世書あしきまふ進歩あり

山
岩
杜園
耕雲
卯七
甲使
馬表
巴立
呂身
柳枝

和相

あしきまふのうはあ
新所をさしむるを待む玉あり
ちりまゝてねぬ地りし物か
新の及のうはさかあしあ
扶の愛おのほろしあふ金
兵のうは外の前もむ七思の
切あしきあつるや照れ
捨指のまふのあしきに
掃りすまふ事書に文も
場あしきまふのうはあ
新同子捨風をぬきま
世書あしきまふ進歩あり

昔のまふの表ありしと相の和相
はらまふ事新出るあ次
新の及のうはさかあしあ
扶の愛おのほろしあふ金
兵のうは外の前もむ七思の
切あしきあつるや照れ
捨指のまふのあしきに
掃りすまふ事書に文も
場あしきまふのうはあ
新同子捨風をぬきま
世書あしきまふ進歩あり

山
岩
杜園
耕雲
卯七
甲使
馬表
巴立
呂身
柳枝

空

空のいふは空のうは空は空をいふ
空のゆへに空は空に空り空
空のゆへに空も空も空も空も

空
空
空

神道

神道のいふは神の道は神の道
神の道は神の道は神の道
神の道は神の道は神の道

神
道
神

神

神のいふは神のいふは神のいふ
神のいふは神のいふは神のいふ
神のいふは神のいふは神のいふ

神
神
神

神

神のいふは神のいふは神のいふ
神のいふは神のいふは神のいふ
神のいふは神のいふは神のいふ

神
神
神

子

子のいふは子のいふは子のいふ
子のいふは子のいふは子のいふ
子のいふは子のいふは子のいふ

子
子
子

子

子のいふは子のいふは子のいふ
子のいふは子のいふは子のいふ
子のいふは子のいふは子のいふ

子
子
子

風

風を空に吹くは松竹の如
木が倒れぬは山のもの
風の音もあやうく山の
木が倒れぬは山のもの
風は空に吹くは松竹の如
木が倒れぬは山のもの
風の音もあやうく山の
木が倒れぬは山のもの

其角
言々
子英
子禰
岩堂
あ考
梅如
比介
凡北

枯柳

枯柳の影を
木が倒れぬは山のもの
風の音もあやうく山の
木が倒れぬは山のもの
枯柳の影を
木が倒れぬは山のもの
風の音もあやうく山の
木が倒れぬは山のもの

一弦
之峰
連至
柳如
比介
凡北

子集

赤松のうらまを病む子集の
おぼやかしき物類のまのまを
ちかきまを半にぬきこいりし
は

赤松
赤松
赤松

か

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

お

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

梅

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

お

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

Handwritten text in the top right margin of the left page, including characters like 木 and 竹.

Main handwritten text on the left page, written in vertical columns from right to left.

Handwritten text in the top right margin of the right page, including characters like 木 and 竹.

Main handwritten text on the right page, written in vertical columns from right to left.

Handwritten text in the bottom left margin of the right page, including characters like 木 and 竹.

唐

将

死をまて掃かたりんむの歌
唐の月の影をまははるる
心とてみまうらむる
縁始にむの眼のまうらむ
むの目さまののこり

前抄をにむ併くはむる
むらむらむらむらむらむら
将衣の神遊へむらむら
むらむらむらむらむら
まむらむらむらむらむら

四葉集

大草

里園

本草

理林

生那

少公

五考

卯也

作老
不詳

夜

夜

夜

夕に入りての夜
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる

夕の影をまははるる
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる

夕の影をまははるる
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる
夕の影をまははるる

徒者

丹丘

天志

深云

風律

二葉

三葉

五葉

六葉

七葉

新 河 脈 系

新河脈系の源は、
 山東省の嶧陽にあり、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、

出た河も、
 山東省の嶧陽にあり、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、

其角
 不卜
 嵐雪

其角
 一洞
 水脈
 之岳
 其角

新 河 脈 系

山東省の嶧陽にあり、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、

山東省の嶧陽にあり、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、
 南流して、
 済南府の済寧に至り、

其角
 不卜
 嵐雪

其角
 一洞
 水脈
 之岳
 其角

鳴

子 楽

子楽の和音の如く人の心ありて
その心ありて心ありて心ありて
其加下其心ありて心ありて

子楽の和音の如く人の心ありて
その心ありて心ありて心ありて
其加下其心ありて心ありて

其角
味花
海部

其角
味花
海部

中 歌

足 竹

中歌の和音の如く人の心ありて
その心ありて心ありて心ありて
其加下其心ありて心ありて

足竹の和音の如く人の心ありて
その心ありて心ありて心ありて
其加下其心ありて心ありて

其角
味花
海部

其角
味花
海部

火桶 火鉢

湯深

細
あり

火桶は、すのこに火鉢を置き、火桶の
お盆をその下に置き、火鉢の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

三月
四月
五月
六月

秋
冬
春
夏

湯
深
細
あり

お 掛

ひ
お
お

お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

信
徳
湯
深
お
北

お
お
お
お

水

瓶破るは水の収の意云々
 甲の丸の者も水もあつて
 冬の色粉のゆきも水も
 枯草も水もあつて水も
 了す水もあつて水もあつて
 網付の水もあつて水もあつて
 ぬぐは他水の対に水もあつて
 足付の境の下のすすもあつて
 又すすもあつて水もあつて
 とすすもあつて水もあつて
 あつて水もあつて水もあつて
 まつて水もあつて水もあつて

凡北
 採丸
 北境
 不
 修
 修
 修
 修
 修
 修
 修

水

瓶破るは水の収の意云々
 甲の丸の者も水もあつて
 冬の色粉のゆきも水も
 枯草も水もあつて水も
 了す水もあつて水もあつて
 網付の水もあつて水もあつて
 ぬぐは他水の対に水もあつて
 足付の境の下のすすもあつて
 又すすもあつて水もあつて
 とすすもあつて水もあつて
 あつて水もあつて水もあつて
 まつて水もあつて水もあつて

凡北
 採丸
 北境
 不
 修
 修
 修
 修
 修
 修

持

炭

炭

たのむやや暖くるのぬふ人
持のよりやあそびに啼きま
けいこののののののののの
あまののののののののの
燃ちあそびののののののの
形らひのののののののの

すゝの炭のののののののの
炭のののののののののの
はまののののののののの
炭のののののののののの
すゝの炭のののののののの

志
去
持
副
命

元
以
口
其
柳

炭

炭

炭

炭のののののののののの
すゝの炭のののののののの

たのむやや暖くるのぬふ人
炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの

炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの

柳
其
口
以
元

其
炭
其
炭
其

其
炭
其

字

入 臘

字のたはまのちのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの

入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの

具角
雲由
汗六
峯牛
存侍
乙孝
加孝

志考
汗六
松丸
松丸

臘

入 日

入 の 夜

入 日

入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの
入るるをいふはまのたのたの

志考
汗六
松丸
松丸

具角
雲由
汗六
峯牛
存侍
乙孝
加孝

餅 楯 衣 砒

みゆもろくろのくし喉のき
瞬つちや火のくんき餅の光
ゆら楯や火をわつち餅の光
餅はきふふふふふふふふふ
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
餅をのほき餅をのほき餅をのほき
目えんやゆらゆらゆらゆら

何世をいを取ありてうい
文をいのえん楯はてふふふ
衣とてういてうい、をいをい

餅の
ゆら
光葉
ま餅
ゆら
ゆら

志也
ゆら
し

柿 糸 元 乃 半

せんかき柿のゆいをきき
せんかき柿のゆいをきき
せんかき柿のゆいをきき

ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら

柿
糸
元
乃
半

ゆら
ゆら
ゆら
ゆら
ゆら
ゆら

年
本
熱

年本熱きも振ふはしり
みり熱の振のしり年本熱

年本
柳

年
忘

世のりて年本熱きも振ふはしり
年本熱きも振ふはしり

年本
忘

年
新

年本熱きも振ふはしり
年本熱きも振ふはしり

年本
新

年
元

年本熱きも振ふはしり
年本熱きも振ふはしり

年本
元

年
春

年本熱きも振ふはしり
年本熱きも振ふはしり

年本
春

年
土

年本熱きも振ふはしり
年本熱きも振ふはしり

年本
土

年
あ

年本熱きも振ふはしり
年本熱きも振ふはしり

年本
あ

教えたる一 南無の安の起る所
して安を請ふのやうにありとも
無言句の如く一 元祿の正正の如く
如きのを車の輪の如く一 用世を
用世して世を教を建てる人
守りて終る一 守りて終る人
守りて終る人のつらさを申すは
守りて終る人のつらさを申すは
守りて終る人のつらさを申すは

きく

以て安を請ふのやうにありとも
無言句の如く一 元祿の正正の如く
如きのを車の輪の如く一 用世を
用世して世を教を建てる人
守りて終る一 守りて終る人
守りて終る人のつらさを申すは
守りて終る人のつらさを申すは
守りて終る人のつらさを申すは

弘州 漫筆



天明七年壬午年 諸集潤板

天保十一年癸卯年 四月再

江戸本石町十軒店

萬笈堂英大助板



江戸本石町十軒店萬笈堂英大助藏版俳書目錄

○類題之部

俳諧發句五百題 春秋庵白雉房撰

小木二冊

新々五百題 田喜庵護物撰

中本一冊

新々五百題 全撰

全一冊

名所千題集 全撰

全一冊

今人東風流 洞海會宗谷撰 具庵一具藏

全一冊

十方向集 全撰

全四冊

故人五百題 松露庵撰

小木一冊

續故人五百題 具庵一具藏

全一冊

同 同 同 同 同 同 同

同

類聚

八景園家松撰

中本四册

同

今人五百題

八雲東溟撰

小本二册

此書一人之力難成... 今人五百題... 八雲東溟撰... 中本二册

同

類題

蘇香齋守撰

中本二册

同

古今撰

蘇香齋守撰

全一册

同

新類題

六合庵万里撰

全二册

同

萬題集

一名題學 八雲東溟撰

全四册

此書古今集... 萬題集... 八雲東溟撰... 全四册

同

秋菴集

白石孝老撰

小本四册

俳諧田毎の口

桃隣天人撰

全一册

同

言筒集

錦舎素柳編

全一册

今人發句集

禾木園校輯

全一册

四季發句帳

朔丸大人撰

全一册

白話七五三

○假名遣物

万葉用字格

春登上人撰

全一册

對照假字格

長野美慈白大人撰

全一册

音便假字格

春登上人撰

全一册

○句集之部

嵐雪句集 一册 玄峰集

其角句集 坎窩文集

寥太句集

吏登句集

巢兆句集

完來發句集

梅翁宗因發句集

太無發句集

存義發句集

獅子賦發句集

全一册

全二册

全六册

全一册

全一册

全三册

全三册

柳居發句集

棋枰漁 甲斐州九集

葛里句集 卷之百

護物七部集

乙二七部集 元木繼大入

饒舌錄

三吟未來記 春秋庵白屋

俳諧竊名 冬玉屋康年殿

今人附合集 永木園後

全一册

全一册

全二册

全二册

全二册

全一册

全三册

全三册

全四册

三編

芭蕉發句集

其角發句集初編

二編

三編

嵐雪發句集初編

二編

乙由發句集

蓼太發句集初編

三編

集卅三

集卅四

集卅五

集卅六

集卅七

集卅八

集卅九

集卅十

集卅十一

集卅十二

同 新五百題初編

同 一編

同 二編

同 古今撰

猶追々出刺

集卅一 二編

集卅一 四編

集卅一 五編

集卅一 六編

俳諧一葉集

同 薄用摺

續今人五百題 涉留為小輯

掌中故人之白題 松路菴主人著

前編 五冊

後編 四冊

全 二冊

全本 全一冊

芭蕉翁略傳常本 中編輯 附錄附 全二冊

近世俳諧十家類題集過日庵祖師輯 全二冊

同 名家類題集同 著 全二冊

續松屋花集心泉庵柳鎖著 全二冊

類題狹義集雜之部 同 輯 全二冊

諸國名家集笠松泰行輯 安房之部 諸國追々出版 全二冊

古今五百題寸珍本 全四冊

俳諧獨警占 全二冊

俳諧道の使占 全二冊

俳諧戀の禁占 全二冊

發行

人坂 秋田屋 太右衛門

同 河内屋 喜兵衛

同 河内屋 茂兵衛

同 河内屋 藤兵衛

江戸 岡田屋 嘉七

同 小林 新兵衛

同 須原屋 茂兵衛

同 須原屋 伊八

本石町十軒店角

製本所 同 英 大 助板

書林

同 英 文 藏

